「明日の教養」と「戦争の記憶」との接点
―占領期以後における雑誌『丸』の変容―

佐藤彰宣

1. はじめに：「総合雑誌」時代の『丸』とは？

雑誌『丸』は、戦争体験記や軍事兵器を専門に扱う一般の商業誌である。1948 年に創刊された『丸』は、出版社を変えながら現在でも刊行が続いており、ミリタリーファンや戦史マニアにとってはお馴染みの雑誌として知られている。

だが、歴史学やメディア史の領域において『丸』の存在は、後述するように断片的にしか論じられてこなかった。一方で『丸』は 70 年以上に渡って刊行が続き、一定数の読者に読まれてきた歴史を持つ雑誌でもある。その意味で、戦後日本の大衆レベルにおける戦争体験の意味の変容や、軍事と平和意識の関係、そしてミリタリーカルチャーの生成過程を知るためには、同誌は見逃せない分析対象といえよう。

ただし『丸』は必ずしも当初から「戦争」を主題とした雑誌ではなかった。実は『丸』には、「総合雑誌」だった時期が存在している。1948 年 3 月の創刊から 1956 年 3 月号までの 8 年間である。そこには、現在の戦記雑誌としてのイメージからは大きなギャップがあるようだ。

例えば、作家の出久根達郎は、帝国ホテルに関する資料を探していたところ、ある古書店の販売目録のなかに『丸』の名前をみつける。1953 年 11 月号の『丸』に掲載されたホテルに関する記事が目に留まったのだ。しかし「注文しようとして、まてよ、と迷った。誌名である。『丸』という雑誌は、確か、戦記の専門誌ではなかったか」と出久根は逡巡したという[1]。「戦記の専門誌」としてのイメージが強い『丸』だが、かつてそうし

[1] 出久根達郎『雑誌倶楽部』実業之日本社、2014 年、253 頁。ただし出久根の回想では「戦記雑誌」としての『丸』を見た記憶は「1954 年」とされている（254 頁）。また 2004 年に『毎日新聞』が行った編集長のインタビューのなかでも「戦記雑誌」化した時期は「1954 年」とされている（「編集長に聞く―丸・竹川真一さん 戦争体験、風化させない」『毎日

た像とはかけ離れた姿を有していた。

『丸』が戦記雑誌とは異なる顔を持っていたことについてはもちろん、戦争体験を扱った歴史学的研究においても多少は触れられてきた[2]。これらの先行研究では、占領終結後に台頭する戦記ブームの傍証として『丸』の存在に言及している。戦記ブームに掉さして「総合雑誌から戦記雑誌へ」と転じた『丸』の変化が強調されてきたわけである。しかしその半面、そもそも創刊当初の「総合雑誌」だった『丸』が、どのような雑誌であったのかについては見落とされてきた。

「総合雑誌」時代の『丸』のあり方を検討することは、戦後日本における「戦記ブーム」の姿を問い直すことにも繋がるだろう。というのも、出版界での戦記ブームは1952年のサンフランシスコ講和条約発効前後を起点とするが[3]、それに対して『丸』の「戦記雑誌」化は1956年4月号であり、一定のタイムラグが存在しているのである。では、このタイムラグはどのような意味を持っているのだろうか。

本稿は占領期とその後1956年までの『丸』に着目して、「総合雑誌」としての『丸』の特徴と動向を明らかにするとともに、同誌が総合雑誌から戦記雑誌へと至るプロセスを検証する。こうした作業は、占領期の出版文化の新たな側面に光を当てることにも貢献すると考えられる。

占領期の出版文化史では、カストリ雑誌と『リーダーズ・ダイジェスト』に触れるのが、これまでは定番であった。特に1946年に創刊された『リーダーズ・ダイジェスト』（日本版）は、『日米会話手帳』やマンガ『ブロ

新聞』2004年7月30日東京夕刊)。しかしながら、上記の通り『丸』は少なくとも1956年3月号までは「総合雑誌」の体裁を取っていた。こうした記憶違いが生じている状況を鑑みても、「総合雑誌」時代の『丸』のあり様を検証する必要はあろう。

[2] 成田龍一『「戦争経験」の戦後史』(岩波書店、2010年）や吉田裕『兵士たちの戦後史』(岩波書店、2011年)、拙稿「「戦闘機」への執着―ミリタリー・ファンの成立と戦記雑誌の変容」(福間良明ほか編『「知覧」の誕生―特攻の記憶はいかに創られてきたのか』柏書房、2015年、285-322頁)、「戦記雑誌における開かれた戦争観―1960年代『丸』のメディア機能」(『京都メディア史研究年報』2号、2016年、73-102頁）などがある。また出版史においても塩澤実信「光人社―戦記に籠められた反省」(『出版社大全』論創社、2003年、584-590頁）のなかでも、出版社および編集者の視点から『丸』が戦記雑誌化する状況が一部言及されている。

[3] 吉田裕『兵士たちの戦後史』岩波書店、2011年、75頁。同書の中で、『丸』の戦記雑誌化は、「「もはや戦後でない」の1956年頃」の「第二の「戦記ブーム」」の一例として取り上げられている（77-80頁)。しかし『丸』は講和条約発効の1952年の時点ですでに刊行されており、戦記雑誌化が単に出版界の「戦記ブーム」に乗ったのであれば、「第一の戦記ブーム」の際でもよかったはずである。その意味で『丸』の戦記雑誌化が、なぜ「第一の戦記ブーム」の時期ではなく、「第二の戦記ブーム」の時期だったのかを明らかにするためには、戦記雑誌化以前の『丸』を内在的に分析する必要がある。

ンディー』などと並んで、「アメリカへの憧れ」を提示するメディアとして検討されてきた[4]。後述するように創刊当初の『丸』も『リーダーズ・ダイジェスト』を模したとみられる要素が多々あるが、その一方で当時の誌面を子細に検討していくと『丸』には「アメリカへの憧れ」とは異質な占領期の姿が浮かび上がってくる。

とはいえ、たしかに「総合雑誌」時代の『丸』は当時から『リーダーズ・ダイジェスト』に比べると日陰の存在とされていた。編集部自身も「本誌の発行部数は大したものではない」と自認している[5]。その一方で、大宅壮一や鶴見祐輔らを主要な論客とし、丸山邦男が編集部に在籍するなど、論壇を引っ張る一線級の著名な知識人や文化人が関わっていた雑誌でもある。その意味で、占領期のメディア史研究としても「総合雑誌」時代の『丸』を検討することは重要な意味を持つだろう。

しかも『丸』は繰り返しになるが、「総合雑誌」として 1948 年から 56 年まで 8 年間という一定期間命脈を保った。当時の社会に生きる人々は「総合雑誌」としての『丸』に何を期待していたのか。

以下では、『丸』の誌面内容と併せて、編集者の理念や読者の関心についても内在的に整理しながら、総合雑誌が戦記雑誌へと至るプロセスを検証したい。

2. 総合雑誌『丸』の誕生

2-1「明日の知識と教養」の提示

雑誌『丸』は 1948 年 3 月に、聯合プレス社より創刊された。聯合プレス社は、社長を芝東吾とし、創刊号の奥付によると創刊当初は東京・銀座に社を構えていた。

『丸』創刊以前に同社が手掛けた刊行物として注目を集めたのが、ラジオ番組「眞相箱」を書籍化した『眞相はかうだ』(1946 年) である。「眞相はかうだ」およびその後継番組「眞相箱」は、GHQ による対日占領政策の一環として、CIE が担当したラジオ放送であり、占領期のメディア政策の

---

[4] 占領期の文化史研究として『リーダーズ・ダイジェスト』に触れている研究としては、五十嵐惠邦『敗戦の記憶』(中央公論新社、2007 年)、谷川建司編『占領期のキーワード 100』(青弓社、2011 年)、土屋礼子編『占領期生活世相誌資料Ⅲメディア新生活』(新曜社、2016 年) などが挙げられる。その他、占領期の雑誌文化についての研究としては、山本武利編『占領期文化をひらく：雑誌の諸相』(早稲田大学出版部、2006 年) などがある。

[5] 「編集後記」『丸』1952 年 1 月号、122 頁。

重要な分析対象としてメディア史研究ではしばしば取り上げられてきた[6]。こうした占領期のメディア政策との関わりの深い刊行物を手掛けていた出版社により、『丸』は 1948 年 3 月に創刊された[7]。

創刊号の表紙には「近代人のトピックス誌」と銘打たれ、「何時間働けばよいか」、「音速を突破する飛行機」、「テレヴイジヨンと広告革命」、「中国に平和がくるか」など、国際情勢や科学技術、ビジネス、映画などさまざまなジャンルの記事が並んでいる。ただ創刊号に限っては「先の戦争」に関わる記事は見当たらず、たしかにこの時点においては現在の戦記雑誌の姿とは隔世の感がある。

では、創刊当初の『丸』が掲げた「近代人のトピックス誌」とは何なのか。創刊号の編集後記には、「近代人のトピックス誌」を名乗る狙いが、以下のように綴られている。

> 企画とアイデイアは絶えず明日のものでありたい。本誌の企画するところも同じだ。そして、本誌が新しい企画のもとに出発したところを読者は知るだろう。知識は固意地に苦んで得るよりも、楽しくフリーに得る方がよい。明日の知識と教養は、読者諸君のポケットにあるだろう。[8]

『丸』が掲げた「近代人のトピックス誌」には、「明日の知識と教養」の提示という意味が込められていた。そこには後に明確に言語化されることになるが、『改造』や『中央公論』などに代表される従来的な総合雑誌との差異化が意図されていた。すなわち、硬派な論稿を並べた総合雑誌に対して、平易な解説記事によって知識を「楽しくフリーに得る」ことができる『丸』という構図である。

「明日の知識と教養」が掲げられた背景には、終戦後の社会における人々の知識欲や活字欲の高まりが関わっていた。占領期の出版文化と人々の知識欲について、土屋礼子は「戦時中に縛られていた知識欲が解放され、か

---

[6] 占領政策として放送されたラジオ番組「眞相はかうだ」・「眞相箱」については、竹山昭子「GHQ の戦争有罪キャンペーン―『太平洋戦争史』『真相はかうだ』が語るもの」(『メディア史研究』30 号、2011 年、17-41 頁)、太田奈名子「占領期ラジオ番組『真相箱』が築いた〈天皇〉と〈国民〉の関係性」(『マス・コミュニケーション研究』94 号、2019 年、93-111 頁) などに詳しい。

[7] 国会図書館に所蔵されている創刊号の表紙には「20,000 部」というメモ書きがあり、発行部数と思われる。

[8] 「編集室から」『丸』1948 年 3 月号、80 頁。

つてないほどの読書熱が人々に広がっていた」としたうえで、「学生や知識人層だけでなく、労働者や農民などあらゆる階層で、活字を読むことが、単なる娯楽としてではなく、新しい時代に遅れず、新日本の担い手に必要な教養や思想を手に入れる手段だと考えられ、肯定された」と指摘する[9]。

従来の総合雑誌の読者であった学生や知識人層だけでなく、知識欲や活字欲が幅広い層に広がる占領期の出版文化なかで、「固意地に苦んで得る」論文ではなく、「楽しくフリー得る」解説記事中心の雑誌形態のあり方が模索されたのである。実際、創刊当初の『丸』の読者欄には、以下のような声がみられる。

> 内容においては改造や評論の上を行きながら、小学校を出ただけの学歴の者にも気楽に読めるような編集ぶりには、感心させられています。この調子をはずしたくないものです。益々健闘を祈ります。[10]

まさに「改造や評論」といった従来の総合雑誌とは異なって、「小学校を出ただけの学歴の者にも気楽に読めるような編集ぶり」が読者からは評価されていたのである。他の読者からも同様に「貴誌のごとき雑誌が、大衆に正確な情報もあたえ、指導されんことを特に望む」と期待されていた[11]。

そしてそこで提示される「明日の知識と教養」とは当初、旧来的な日本のあり方とは異なる、「国際性」や「アメリカ」らしさが強調されたのである。

それゆえに『丸』が掲げた「近代人のトピックス誌」に呼応するように、創刊号への感想としては「平易な科学的記事を出来るだけ多く載せていただきたい」という読者の声が寄せられた。編集部も応じて「今後海外の新しい科学方面の記事をどしどし紹介」していくと返答している[12]。その後もスポーツや将棋などの娯楽とともに、「経済・科学・外国生活等」に関する記事の掲載を希望する声や[13]、「貴誌は「近代人のトピックス誌」らしく、もつと海外事情の全般に亘つて掲載して下さい」という声が読者欄にはみられる[14]。

---

[9] 土屋礼子編『占領期生活世相誌資料Ⅲメディア新生活』新曜社、2016 年、19 頁。
[10] 「赤・青の信号　読者だより」『丸』1948 年 12 月号、94 頁。
[11] 「赤・青の信号　読者だより」『丸』1948 年 8 月号、90 頁。
[12] 「赤・青の信号　読者だより」『丸』1948 年 4 月号、90 頁。
[13] 「赤・青の信号　読者だより」『丸』1948 年 6 月号、90 頁。
[14] 「赤・青の信号　読者だより」『丸』1948 年 8 月号、90 頁。

上記の創刊号の編集後記において「明日の知識と教養は、読者諸君のポケットにある」という言葉にもあるように、創刊当初の『丸』はB6判の文字通りポケットサイズでの刊行であった[15]。

同じB6判の形態で、当時注目されていた雑誌が、『リーダーズ・ダイジェスト』である。1946年に日本版が創刊され、100万部を超える発行部数で当時話題になっていた『リーダーズ・ダイジェスト』だが、「ダイジェスト」つまり解説記事中心誌面構成なども『丸』と類似していた。もっとも、当時出版界を賑わせていた『リーダーズ・ダイジェスト』を後発の『丸』が模倣したという見方が適切だろう。

ただし、『リーダーズ・ダイジェスト』と『丸』との間にも見落とせない相違がある。『リーダーズ・ダイジェスト』は現地アメリカ版の翻訳記事を中心にした誌面構成だったが、一方で『丸』は政財界の論客からの寄稿を募っていくこととなる。

2-2 公職追放者の起用

創刊号の目次では無記名の記事も多かった『丸』だが、翌号（1948年4月号）からは、ほぼ全てが署名入り記事となる。そうしたなかで目に付くのは、論客人の顔触れである。

第2号となる1948年4月号では、津村秀夫「映画演出の巨匠ゴオルドウイン」、小林一三「根本対策を立てよ」などが掲載された。津村は戦時期には座談会「近代の超克」にも出席した映画評論家であり、小林は言わずと知れた政財界に大きな影響力を持った実業家であるが、両者はともに当時公職追放に処せられていた。翌5月号でも小林一三「インフレ防止の実行案」、小林同様に公職追放の身にあった政治家・鶴見祐輔「ヂスレリー苦闘伝」などが名を連ねている。鶴見はその後も、巻末の「特別読物」をはじめ度々寄稿している（表1）。小林や鶴見の他、創刊当初の『丸』は大映社長の永田雅一、ダイヤモンド社社長の石山賢一ら政財界の公職追放者を主要論客とした。同時に、彼ら公職追放者を主題とした読物、「石山賢吉と野依秀一」（1948年11月号）や「永田雅一と大映」（1949年4月号）なども掲載された。

---

[15] 小型なB6判での刊行は、1948年3月の創刊から1956年3月号までの8年間の「総合雑誌」時代続けられた。

表 1 「特別読物」一覧（1948 年～1949 年の目次より筆者作成）

年月	執筆者	記事名
1948 年 3 月号	三浦五郎	クレムリンの円卓
4 月号	藤澤政男	中国工業化の鍵
5 月号	鶴見祐輔	ヂスレリー苦闘伝
6 月号	相馬逸郎	半球を飛ぶロケット
7 月号	平尾史郎	ヒットラーの終焉
8 月号	鶴見祐輔	ウインストン・チャーチル
9 月号	木下八郎	断末魔のラバウル
10 月号	ジヤック・ブリンクリー	フランク・ブリンクリーと明治時代
11 月号	増田信一郎	石山賢吉と野依秀市
12 月号	藤田五郎	カァル・ツァイスの生涯
1949 年 1 月号	鶴見祐輔	スターリン
2 月号	高橋昭夫	ソ連抑留記
3 月号	古村啓藏、三上作夫、(岸本牧夫)	南雲とサイパン作戦
4 月号	増田信一郎	永田雅一と大映
5 月号	澤田謙	産業界の惑星カイザー
6 月号	佐々木邦男	ソ連外交官脱走記
7 月号	岸本牧夫	山本元帥の最期
8 月号	澤田謙	新聞天才の生涯
9 月号	大久保宏	デ氏と世界石油政略
10 月号	大久保宏	航空王Ｊ・Ｔ・トリップ
11 月号	無記名（「M」）	朝日新聞を解剖する
12 月号	無記名（「B」）	天皇陛下の一日

公職追放は、GHQ の占領政策として、軍隊の解放や戦争犯罪人の逮捕とともに強制的に執行された非軍事化改革の一環として 1946 年 1 月より開始されたものである[16]。1951 年および 1952 年の追放解除にいたるまで、

[16] 公職追放については、増田弘『公職追放』（東京大学出版会、1996 年）をはじめ、楠綾子『現代日本政治史①占領から独立へ 1945～1952』（吉川弘文館、2013 年）、楠綾子「米国の日本占領政策とその転換」（山内昌之ほか編『日本近現代史講義』中公新書、2019 年、

追放対象者は官庁と関係の深い会社などの役員や議員などの公職に就くことが禁止された[17]。

それではなぜ「戦時指導者」として公職追放に処せられた政財界の大物たちによる寄稿を『丸』は掲載したのか。公職追放者を積極的に起用した理由が、後年 1951 年追放解除となった際に編集後記で語られている。

> 思えば敗戦以来六年間、つねにわれわれの頭に押しかぶさつていたものは、追放令の問題であつたといえよう。単に束縛をうけるだけでなく、政令違反というわずらわしい取締によつて、どれほど多くの人が悩まされ、おびやかされてきたことであろう。
>
> 実際は確たる理由なくして、あたら有為の才能をいだきながらこれを活用する機会を封ぜられ、むなしく髀肉の嘆を抱いていた人も決して少なくなかつた。
>
> 追放といつても政治関係、経済関係、言論関係等、追放の範囲は限定されていた。それにも拘わらず、一般新聞雑誌はこれらの人々をロツクアウトしていた。しかし本誌は信ずるところあつて、創刊以来、政令に反せざる範囲において、これらの追放中の人々からも建設的な意見であれば、はばかるところなくこれを掲載しつづけてきた。もとより読者に対して出来得るかぎり、公平の立場から広く意見、資料を提供しようとする以外に他意はなかつたのである。そのために、誤解をまねいたことも少なくなかつた。
>
> 今後も一党一派に偏せず、あくまでも中道を歩む方針を堅持してゆきたいと思う。[18]

『丸』の編集部が述べるところでは、世間の風当たりが強く、公称追放者の存在を一般の新聞や雑誌は敬遠していたという。そんななかで、むしろ『丸』は、既存のメディアとの差異化として大物政治家・財界人を積極的に起用したのである。そのため「明日の知識と教養」を、戦前・戦中と「過去」に影響力を持った公職追放者らが提示するという構図が誌面上では展開されたのである。

『リーダーズ・ダイジェスト』をはじめとした占領期の多くの雑誌は、

203-219 頁)、吉田裕『兵士たちの戦後史』(岩波書店、2011 年) などに詳しい。

[17] 吉田裕『兵士たちの戦後史』岩波書店、2011 年、43 頁。

[18] 「編集のひととき」『丸』1951 年 9 月号、2-3 頁。

GHQの民主化政策にも掉さして、五十嵐惠邦が指摘するように「アメリカの日常生活を理想化したかたちで描いた」[19]。「国際性」や「先進的なアメリカ」を奨励し、それを積極的に受け入れることは、戦時期までの「旧来的な日本」を否定し、自らの戦争責任から背を向けることの裏返しでもあったのである。

そうしたなかで創刊当初の『丸』には、同じ形式の『リーダーズ・ダイジェスト』を想起し「国際性」を期待する読者もいたが、実際の誌面はむしろ戦時期までの大日本帝国の政財界を背負った要人たちによって担われていた部分が大きい。

3. 戦記ものの位置づけ

3-1 抑留体験の生々しさ

公職追放者が頻繁に登場する『丸』は、「先の戦争」の影を色濃く帯びていた。創刊号にこそ戦争に関する記事は掲載されなかったものの、断続的に戦記やそれに類する手記が掲載される。

第2号の1948年4月号には、元陸軍上等兵・田鎖源一の手記「欧露抑留記」が掲載された。「インテリ兵士「鉄のカーテン」を覗く」と銘打たれた同記事で記されたのは[20]、第二次大戦直後から東西冷戦が露見する間のロシアでの抑留体験である。第二次世界大戦の末期、ソ連が対日参戦を行うことによって、終戦からの数年間、約60万人の日本軍の将兵や一部の民間人がソ連やモンゴルに連行され、各地の収容所にて強制労働を強いられた[21]。『丸』に掲載された田鎖の手記は、まさにそうしたロシアでの抑留体験が綴られたものであった。

重要な点は、この当時の戦記の持つ意味合いである。戦争体験やそれに付随した抑留体験は、過ぎ去った過去のものではなく、この当時に現在進行形の出来事であった。「欧露抑留記」に対して、読者から以下のような声が寄せられた。

> 「丸」四月号の「欧露抑留記」を非常に興味深く読みました。私の弟がシベリア辺に抑留されているらしいのですが、シベリアの実情は欧露と違つて大部悪いような噂を聞きますが、どんなものでしようか、

---

[19] 五十嵐惠邦『敗戦の記憶』中央公論新社、2007年、128-129頁。
[20] 『丸』1948年4月号、31頁。
[21] 富田武『シベリア抑留』中公新書、2016年、1頁。

お伺い致します。[22]

肉親がシベリアに抑留されているこの読者にとって、この手記は単なる国際情勢の解説記事の一つではなく、「シベリアの実情」すなわち肉親の現況を知るための手がかりであった。ソ連の抑留については、1948 年 9 月号にも中野敏子の手記「ソ連に捕われて」が掲載された。この手記については、実際に手記のなかに出てくるシベリアのバルナウル収容所で抑留され、手記の書き手の中野敏子と「一緒の所にいた」という抑留体験者からの感想が寄せられている[23]。当時掲載された抑留体験の手記は、読者にとっても生々しい体験を想起させるものであった。

その後も「抑留者の見たシベリア」として元陸軍・重砲兵長の田村一二三による「ハバロフスク地区の二ヶ年」（1948 年 12 月号）のほか、上記の表 1 にもあるように、巻末読物として関東軍の元少年航空兵だった高橋昭夫による「ソ連抑留記」（1949 年 2 月号）や、佐々木邦男「ソ連外交官脱走記」（1949 年 6 月号）などが掲載された。

3-2「真相」を読む高揚感

抑留体験記とともに、戦争関連の読物や手記も次第に大きく取り上げられていくようになる。

誌面に初めて登場する戦記関連のものは、野村吉三郎「日本海軍回顧録」（1948 年 8 月号）である。「先輩及び亡友の追憶」として同記事を綴った野村は、戦前・戦時期に海軍軍人および駐米大使の立場にあって終戦後は公職追放に処されていた[24]。

さらに翌号にも巻末読物として元陸軍主計中佐・木下八郎「断末魔のラバウル」（1948 年 9 月号）が掲載されると、戦場での従軍体験を持つ読者から以下のような声が寄せられた。

> 九月号の特別読物「断末魔のラバウル」は貴誌のいわれるように、トルストイの「セバストボール」に比較されるかどうかは知りませんが、戦争中南方第一線に従軍した小生には全く感慨無量な点がありました。いわゆる外国物よりも、あのような日本人自身の体験した記事

---

[22] 「赤・青の信号　読者だより」『丸』1948 年 5 月号、90 頁。
[23] 「赤・青の信号　読者だより」『丸』1948 年 10 月号、94 頁。
[24] 野村吉三郎「日本海軍回顧録」『丸』1948 年 8 月号、18 頁。

を今後も載せていただきたく思います[25]

「いわゆる外国物のよりも」とあるように読者も『リーダーズ・ダイジェスト』を意識しながら、『丸』に戦争関連の読物を求めていた。こうした声を受け、その後も芝均平「レイテ海戦はどう戦われたか」および第二艦隊長官・元海軍中将の栗田健男らによる「なぜレイテ戦に敗れたか」（1948 年 11 月号）など、大々的に戦記ものが取上げられていく。生々しい戦争体験を持つ当時の読者もこうした戦記関連の読物を歓迎した[26]。

特に反響が大きかったのが、岸本牧夫「戦艦武蔵」（1949 年 1 月号）および翌月号に掲載された戦艦武蔵の写真であった。

> 「丸」二月号を拝見しまして、何よりも最大の収穫は「戦艦武蔵」の写真でした。戦時中固く秘められていた船型写真が、貴誌により発表されるとは全く意外でした。あれこそ「秘められたる巨艦武蔵の写真発表」として、大いに宣伝すべきではなかつたでしようか。海軍の搭乗員であつた自分でさえ、写真として見たのは初めてです。戦時中極秘されていた陸海空軍の各事実、写真などを次々と発表して下さいませんか。敗戦下の現在であつても、皆が知りたがつていることですから、必ず歓迎されることと思います[27]

戦艦武蔵の写真を初めて見たことの驚きが綴られている。写真では搭乗員ですら見たことがなかったというように、戦時期に戦艦武蔵は、戦艦大和など他の戦艦とともに存在は多くの国民に知らされるものではなかった。もっとも戦艦武蔵を扱った著作としてはベストセラーとなった森正蔵『旋風二十年　解禁昭和裏面史下巻』（1946 年）などがあり[28]、必ずしも『丸』の同記事が嚆矢というわけではない。それでもここで読者から期待

---

[25] 「赤・青の信号　読者だより」『丸』1948 年 10 月号、94 頁。

[26] 「レイテ海戦」に関する記事を歓迎する声としては以下のようなものがある。「私は二十六年間、海外生活をしていて、母国の土を踏んでからまだ二年半の新参者です。引揚げ以来、日本の雑誌を読む暇もなかつたのですが、貴誌が第一番にレイテ海戦の記事を掲載して深い感銘をあたえたので、私は貴誌の特色を砂漠のオアシスとして毎月愛読している次第です。願わくば、我々の修養に資する記事を選んでいただきたいと存じます」（「赤・青の信号　読者だより」『丸』1949 年 10 月号、114 頁）。

[27] 「赤・青の信号　読者だより」『丸』1949 年 4 月号、106 頁。

[28] 一ノ瀬俊也『戦艦武蔵』中公新書、2016 年。他にも終戦後における戦艦武蔵への言及としては、書籍版『眞相はかうだ』（聯合プレス社、1947 年）のなかにも「戦艦武蔵沈没の模様」についての解説がみられる（11 頁）。

されているのは、「戦時中に極秘にされていた」戦争の「事実」を「発表」することである[29]。

こうして『丸』における戦記には、戦争の「事実」や「真相」を暴くことが期待されるようになる。

> 私は当地ユネスコ事務局員ですが、貴誌に毎号掲載される第二次大戦の真相は、平和を希求する我々のよき反省の糧であり、覚醒剤であろうと思います。あの悲惨だつた戦争の実態を知ることによつて、将来の日本に再び灰色のヴエールのかかることがないようにしたいものです。この悲しむべき戦争の真相を、順次に載せていただきたく存じます[30]

戦記によって提示される「戦争の真相」は、「反省の糧」であるとともに「覚醒剤」としての効用もあるとこの読者は述べる。「覚醒剤」の意味は推し量るしかないが、「日本人の目を覚まさせる」といった啓発的なニュアンスを指していると考えられる。当時、先述したラジオ番組「眞相はかうだ」をはじめ、共産党系の雑誌「眞相」（眞相社）の隆盛などを通して、メディア界で「眞相」は流行語となっていた[31]。「総合雑誌」としての『丸』に戦記が求められた一つの要員として、他の政財界の暴露記事と同じように「真相」に触れることの高揚感が一つの駆動因となっていた。

3-3 遺族にとっての戦記

ただし、戦記の読み方については、暴かれた「真相」に触れるだけないものも存在した。1949 年 3 月号に特別読物として掲載された「南雲とサイパン作戦」に対して、読者から以下のような投書が寄せられている。

> 三月号の「南雲とサイパン作戦」を読ませて戴きまして、遺族一同くわしい戦場の様子を知ることが出来、はじめて心の中の整理がついたような心地がいたしました。主人の性質や日頃の言動から推しまし

---

[29] 同様の声として以下のようなものがある。「戦艦武蔵、レイテ海戦等の特種を載せて下さるので、毎号首をながくして御誌の出るのを待つています。ついては、このような戦時中は秘密にされたまま、現在でもなお秘密のヴエールに覆われている諸記録を、今後も発表していただけたら幸いと存じます」（「赤・青の信号　読者だより」『丸』1949 年 3 月号、106 頁）。

[30] 「赤・青の信号　読者だより」『丸』1949 年 9 月号、110 頁。

[31] 佐藤卓己『流言のメディア史』岩波新書、2019 年。

て、やはり玉と砕けたことを確信いたしております[32]

この読者は、戦記のなかで取り上げられた「サイパンの戦い」で夫を失ったという遺族である。遺族にとっての戦記は、「くわしい戦場の様子」として肉親の最期を知るための数少ない手掛かりであった。同時に、終戦からまだ４年しか経っておらず、肉親を失った悲しみが冷めないなかで、「心の中の整理」を付けるための拠り所であった[33]。

さまざまな読み方が行われる戦記もののなかで、次第に「総合雑誌」としての趣旨に沿う読み方をする読者の声が登場するようになる。

「丸」は現在氾濫している雑誌の白眉だと思います。編集者の努力も多としますが、どこまでも真面目な読者の集まりであつて欲しいものです。七月号の「山本元帥の最期」は真に思い出深い、我々にとつて忘れてはならない記事でした。我々は母国再建に資する羅針盤を「丸」から見出したいと考えます[34]

ここには「母国再建に資する羅針盤」として、山本五十六の戦死の状況を紹介する戦記を読み込む読者の姿が浮かび上がる。こうしてナショナルな「戦争の記憶」としての戦記も、『丸』が掲げた「明日の知識と教養」の一つとして位置づけられていく。

4. 党派性の否認

4-1「丸はすべてをふくむ」

ここまでは戦記関連記事に注目してみてきたが、もちろん当時の『丸』はそれ以外に多様な記事を備えた「総合雑誌」であった。ただ戦記関連の記事を中心に好評を得ていくなかで、『リーダーズ・ダイジェスト』とは異なる、独自の雑誌としての地位を獲得していった。

私は「丸」を毎号興味深く読んでいます。世界中の出来事、人物評、

---

[32] 「赤・青の信号　読者だより」『丸』1949 年 5 月号、106 頁。

[33] 遺族が戦死者を懐古し、肉親を失った悲しみを慰めるための読み方は、1956 年の「戦記雑誌」化された『丸』においても引き継がれていく（拙稿「「戦闘機」への執着―ミリタリー・ファンの成立と戦記雑誌の変容」（福間良明ほか編『「知覧」の誕生―特攻の記憶はいかに創られてきたのか』柏書房、2015 年、285-322 頁））。

[34] 「赤・青の信号　読者だより」『丸』1949 年 8 月号、106 頁。

外国人の書いたものしか載つていない著名雑誌に比べて、遜色ありません。日本人としてはむしろ「丸」の内容の方が消化し易いのではないかと思います。[35]

「国際性」に象徴される『リーダーズ・ダイジェスト』に対して、『丸』には、「日本」の話題を扱うことが期待された。

こうしたなかで 1949 年 12 月号より、新たな取り組みとして「丸の問い」の欄が設けられる。この欄について編集部は「終戦四年にして、なお混沌たる社会情勢の波に掉さして行くにはどうしたらようであろうか、本誌は「日本の当面している最大の問題」について識者に問うてみた」と趣旨を述べているが[36]、特定のテーマを毎回一つ取り上げて、複数の論者からの応答を掲載したものである。

初回（1949 年 12 月号）の「日本の当面している最大の問題」というテーマに対しては、ダイヤモンド社顧問・石川賢吉「失業の問題」や、文芸評論家・青野季吉「民主主義の日本化」、そして大宅壮一「アンパイアがない」などの回答が寄せられている。そのなかで、大宅は「一方で徳田球一、一方では児玉誉士夫、笹川良一等が最近「憂国の人々に訴う」というような本を盛んに書き始めた。元の建国会の赤尾敏などのポスターも見かける。同じ憂国や愛国が左右両翼で叫び出されたので、国民はどつちがどつちか戸迷いしている感じである」として、「国民」の視点から両極化する議論のあり方を批判的に論じている[37]。

続く 1950 年 1 月号では、「皇太子の留学をどう考えますか」というテーマのもとで、芦田均「意見を慎む」、鶴見祐輔「時期尚早」、小泉信三「私見を控える」など大物論客の他に、ライバル誌であるはずの『リーダーズ・ダイジェスト』日本版編集長の鈴木文史朗も「一日も早く」という回答を寄せている[38]。政財界の大物論客だけでなく翌 2 月号では、「進駐軍の印象」として、「戦災孤児」による「一宿一飯の恩義」や、「タツプダンサー」

---

[35] 「赤・青の信号　読者だより」『丸』1949 年 6 月号、106 頁。
[36] 「丸の問い」『丸』1949 年 12 月号、76 頁。
[37] 大宅壮一「アンパイアがない」『丸』1949 年 12 月号、80 頁。大宅はさらに「日本という小さなグラウンドで、アンパイアのない試合をしている。しかも、競技者双方が自分に都合のいいルールを使つていて、両方ともセーフ、セーフと叫んでいるような有様である。今こそ進駐軍という場内取締的な力があるからいいが、これは永久につづくものではない」とし、「要するに、左右両者の中に割つて入つて双方が納得する形で収まりをつける人がない、理論がないことが当面の日本の最も重大な問題である」と説いている。
[38] 「丸の問い」『丸』1950 年 1 月号、27-31、35-37 頁。

の「生活力が旺盛」など市井の人々の声も掲載されている[39]。

以降も「講和条約締結後あなたは誰を駐米大使に選びまかす」(1950 年 3 月号)、「無人島に持つて行く本」(4 月号)、「プラトンの性哲学」(5 月号) と、政治問題のみならずさまざまなテーマが取り上げられた。

さらに 1950 年 7 月号より「「丸」誌上ラウンドテーブル」へと改称された同欄では、映画をはじめとした文化・芸術に関するテーマが顕著となる。その一方で「大陸の脅威をどう見るか」(1950 年 9 月号) [40]や、「共産党はどうするか」(1951 年 12 月号) [41]などのように東西冷戦やレッドパージの問題も積極的に論じられていく。これらの企画の論客としては、鍋山貞親や佐野学ら戦時期に転向した元共産党の大物らの名も確認できる。

そうしたなかで目を引くのは、講和条約の発効を控えるなかで企画された「大川周明とアジア連邦」(1952 年 1 月号) である。「あらゆる点から、アジア民族の解放という目的のために、果してアジア連邦というものは結成されるか、その中心勢力となる国はどこか、その指導精神とは何か」という題のもとで、大川周明をはじめ、北昤吉、土屋清、大宅壮一、元陸軍大将の眞崎甚三郎などが論客として名を連ねた。

大川周明は、以降「丸のラウンドテーブル」以外にも盛んに登場し、「アジアの再検討」(1952 年 4 月号) を寄稿し、同号では山浦貫一、北昤吉、鍋山貞親、石川三四郎らによる「大川周明氏を論ず」も掲載された。さらに「刑務所人物談」(1952 年 7 月号) [42]の寄稿のほか、誌上ラウンドテーブル」の「米国勢力の限界点」(1952 年 12 月号) でも赤尾敏、橋本徹馬、北昤吉らとともに、講和条約が発効され日本が主権を回復するなかで、それまでの GHQ による対日占領政策を批判した[43]。

---

[39] 「丸の問い」『丸』1950 年 2 月号、34-38、77-78 頁。

[40] 「「丸」誌上ラウンドテーブル」『丸』1950 年 9 月号、60 頁。寄稿者には、大宅壮一、尾形昭二、石川三四郎、鍋山貞親、下村海南、平林たい子らが名を連ねた。同欄では「中国はすでに共産政権の治下にある。マライ、インドシナ、フイリツピン等における共産党の地下運動も熾烈をきわめている。日本は極東反共勢力の防波堤として、この共産攻勢にいかに対処すべきであるか」(60 頁) とテーマ設定の意図が述べられている。

[41] 「丸の問い」『丸』1951 年 12 月号、98-104 頁。なおこの号では一時的に「丸の問い」という名称に戻される。「今後の共産党対策はどうあるべきか、国内的に問題の焦点として注視されるに至った非合法化は、果して是か非か」(98 頁) として、岩淵辰雄、佐野学、浅沼稲次郎、「八幡製鉄労組委員長」岡田芳彦、阿部真之助、菊川忠雄、「日本婦人有権者同盟」斎藤きえ、大宅壮一、渡辺銕蔵らが回答を寄せている。

[42] 「大川氏が戦犯として巣鴨に入つたのは三度目であつた、それまで五・一五事件、二・二六事件、大川氏はその当時のことども、巣鴨の同房の松井将軍、東条、豊田、眞崎のことなど語る」(大川周明「刑務所人物談」『丸』1952 年 7 月号、68 頁)。

[43] 同企画においては、設定そのものが占領政策の批判的なニュアンスを含むものであっ

以上のように当時の『丸』は、一方で共産党について取り上げたかと思えば、他方で公職追放者と同様に大川周明も盛んに誌面上に登場させている。ともすれば特定の政治的な思惑を読み込まれそうな誌面構成だが、編集部は自己弁護するかのような形であくまで「真相」を明らかにすることにあると強調する。

> 本誌は創刊以来わずか四年の間に、時には右翼と見られ、時には左翼とも見られたことがあるが、本誌を発行している目的はあらゆる事象の真相を発表することにある。
>
> 永い目で見ていただけば(ママ)、本誌が何ものにもとらわれていないことは、はつきり認めていただけることと思う。
>
> 私たちは今後もこの方針で進む。今までも、時の政府の方針に反するような記事を載せたこと一再ならずであるが、この編集方針を変えずに行く積りである。
>
> といつて、私たちは徒らに醜をあばき陋を摘発して快哉を叫ぶ者ではない。あくまで建設的な明るい面をとりあげて行く。[44]

「何ものにもとらわれてもいない」とする党派性の否認は、この時期の編集後記で度々強調された。前号でも「雑誌の編集、特に「丸」のように内容的に新しい型の雑誌を編集していて絶えず心配になるのは、私たちが無意識のうちに何ものかに偏したり、誤つた見方をすることです」と、政治的な誌面構成にならぬよう自覚的であると述べている[45]。実際、上記の「丸の問い」が始まった時期に、「「丸」の雑誌展望」の欄も開設され、「最近の注目すべき雑誌記事」として、『改造』や『中央公論』、『文藝春秋』などの総合雑誌の評論が紹介されるようになる[46]。「論壇」を見渡す雑誌としての役割を担おうとするのであった。

同時期に（1949 年 12 月号から）裏表紙に表記された「“丸はすべてをふくむ”」「“すべては丸より”」という言葉も、こうした文脈を踏まえると

た。編集部は「アメリカの日本占領政策には大きな過ちがあつた、そしてそれは、中国に対しての政策に一貫性を欠くことと軌を一にする、単なる採算主義によつて、他の民族を支配し、これに独善的自己の主義を強制しようとするならばやがてその勢力は一歩一歩後退せざるを得なくなるであろう、心すべきは自負驕慢の思想である」（『丸』1952 年 12 月号、82 頁）と述べている。

44 「編集後記」『丸』1952 年 4 月号、120 頁。

45 「編集後記」『丸』1952 年 3 月号、123 頁。

46 「「丸」の雑誌展望」『丸』1950 年 10 月号、96-99 頁。

『丸』が党派性を超えた存在であることをアピールするものとして解釈できる。だからこそ、党派性を否認する『丸』にとっては、左右両派を俯瞰できる大宅壮一のようなジャーナリストは親和的であり、「総合雑誌」の『丸』には、大宅の論稿が頻繁は掲載されたのである。

4-2「アルコール」としての戦記

「総合雑誌」としての『丸』が強調した、「真相」を発表するための党派性の否認という態度は、戦記に「明日の教養」を読むこむ意味合いを強調することになる。

> 本誌はいつも目の前の現象だけでなく、数年先きの問題も具体的に取り上げたいと心掛けています。
>
> 戦記物の流行のはるか以前に「戦艦武蔵」を掲載したのは、当時放心状態に陥つていたわれわれに足元を見つめる一つのきつかけを与えようとしたためで、その頃「皇太子の外遊はどこにすべきか」を取り上げたのも、アメリカ文化万能主義をじつくりと考えてみたいと思つたからです。[47]

占領終結後の「戦記ブーム」のなかで、『丸』は「はるか以前に「戦艦武蔵」を掲載した」と自らの先見を自負している。と同時に、皇室関係の読物は「アメリカ文化万能主義」の相対化にあったと編集部は説いている。

こうしたなかで大川周明に続いて、『丸』の誌面上に大々的に登場したのは、辻政信であった。辻政信は、先の戦争ではノモンハン事件など複数の戦いで指揮を担った元陸軍大佐であるが、終戦後に戦犯容疑での追及を逃れるために各地に潜伏した。その潜伏の道中を綴った手記『潜行三千里』は、当時大きな反響を呼んでいた。

そうしたなかで辻政信は、「米ソ戦わば」(1953 年 1 月号) を寄稿する。編集部は「辻氏の第三次大戦観の総決算！人類の文化滅亡の危機・第三次大戦必至という辻氏の「アメリカ必ずしも有利ならざる」根拠は奈辺にあるか。弱国日本はこれに対し、いかに処すべきか。辻氏畢生の痛論」と喧伝したが[48]、編集部は辻を誌面の全面に据えることへの読者からの批判も

---

[47] 「編集後記」『丸』1952 年 8 月号、139 頁。

[48] 辻政信「米ソ戦わば」『丸』1953 年 1 月号、53 頁。翌月号（1953 年 2 月号）でも、元大本営陸軍作戦課長元大佐・林三郎「朝鮮戦線の新情勢」が掲載され、冷戦状況や朝鮮戦争を読み解くためには、元軍人の視点が有用であると以下のように説かれた。「前号の辻

想定していたようである。

> 辻政信氏の「米ソ戦わば」はしばしば問題を惹起した同氏の第三次大戦観の総決算ともいうべきもの。同氏の意見を是とする人にとつても、否とする人にとつても必読の文章でありましよう。[49]

ここでも「意見」、すなわち党派性を問わずに読むことが推奨されている。

注目すべきは、辻の寄稿に付記された大宅壮一による解説「辻政信という人物」である。同解説では、辻の『潜行三千里』をはじめ、人々が戦記ものに魅了される要因が同時代を生きる視点から分析されている。大宅は「戦後従軍記者や復員軍人によつて、戦記類が物凄く大量に生産されたのも、やはりそれだけの需要があつたからである」と戦記ブームの到来を述べ、「しかし、その中で後世まで残るものが、果してどれだけあるだろうか」という[50]。そのうえで、文学作品としての戦記の問題点、そして戦記ブームの社会性について次のように指摘している。

> しかし彼等が職業的な作家として後へ残るためにはそれだけでは駄目で、例えば大岡（昇平―引用者）の「武蔵野夫人」のような作品を書かねばならない。総じて純文芸作家志望者の書いた戦記文学が大衆性を欠いているのに反し、旧職業軍人の書いた戦記物の中で、圧倒的な売行きを示しているのは辻政信のものである。「潜行三千里」「十五対一」をはじめ、彼のものは何でもベスト・セラーになるというから、それだけ確実に読者をつかんでいるわけだ。（中略）
>
> 彼の書く物には、いろいろと非難はあるが、まるで真田大助や猿飛佐助の講談を読むようにおもしろい。文章家が主に非難するのであろうが、文章家の指す文章が文章であるというのは間違つている。生活感情がよく出ていればそれでよいのだ。（中略）彼のフアンの大部分

政信氏の「米ソ戦わば」に引き続き今号では日本有数のソ連通、元大本営陸軍作戦課長林三郎大佐が最新の情報と資料を駆使して、ソ連の実勢力を衝き、その朝鮮における今後の出方を究明しております。日本人に最も関心深い「朝鮮戦線の新情勢」が色眼鏡なしに描かれております」（「編集後記」『丸』1953 年 2 月号、169 頁）。

[49] 「編集後記」『丸』1953 年 1 月号、155 頁。

[50] 大宅壮一「辻政信という人物」『丸』1953 年 1 月号、67-70 頁。なお大宅は「文芸作品としては大岡昇平の「俘虜記」梅崎春生の「日の果て」駒田信二の「脱出」等が比較的好評であつた」と述べている。

は、僕のいう類似インテリである。知識はあるが、思索できない人間たちである。簡単に興奮し易い。だから彼は一種のアルコールでもある。アルコールとして高級ではないが、簡単に酔える。古い日本へのあこがれとか、意気、感激したいそのチヤンスをよく与える。ここに彼の文章の性格がある。[51]

大宅は、戦記ブームのなかで人々の関心を集めているのは、「大衆性を欠いた戦記文学」ではなく、「旧職業軍人の書いた戦記」であり、その要因は何よりも「生活感情がよく出ている」からであると分析している。さらに、そのような「大衆性」を持ち「生活感情」に溢れる戦記は、「簡単に酔える」ような「アルコール」でもあるとし、それらを通して「古い日本へのあこがれ」に酔う読者のことを「類似インテリ」と大宅は評する。

「いずれにしても今の日本ではこういうものが争つて読まれるという事実に目を蔽つてはならない」[52]というのはその通りだとして、重要な点はこうした大宅による指摘が、『丸』そのもののあり方にも及んでいることだ。つまり、大宅の批判は、読者の期待に応えて「簡単に酔える」戦記を盛んに掲載し、「古い日本へのあこがれ」を「明日の教養」と正当化して提示する、そうした『丸』の問題点としても読むことができる。その意味で、党派性を超えて辻の存在と戦記ブームについて、大宅が俯瞰的に読み解いた結果、かえって「総合雑誌」としての『丸』の矛盾を内側から批判することとなったのである。とはいえ、その批判は間接的であったがゆえに、『丸』の編集部には正面から受け取られることはなかった。

5. 「総合雑誌」としての盛衰

5-1 拡大路線からの急転直下

1953 年 3 月に『丸』は「創刊五周年」を迎え、記念号を刊行する。同号の巻頭では、聯合プレス社社長芝東吾は「「丸」創刊五周年に際して」として、次のようにこれまでの経緯を振り返っている。

懐えば終戦時の混乱期に、編集スタッフ僅かに三名、B6 判八〇ページの雑誌として、わが『丸』（マル）が出発したのは早や五年前のことになつた。その間、愛読者の皆さんから寄せられた御好意に対し

[51] 大宅壮一「辻政信という人物」『丸』1953 年 1 月号、67-70 頁。
[52] 大宅壮一「辻政信という人物」『丸』1953 年 1 月号、70 頁。

て、ここに厚く御礼を申上げる次第である。

元来、誌名には『丸』には円形という意味のほかに、完全という意義があり、従つて私たちは、『丸』はすべてを含む、という標語により、日本の全家庭の人々に読まれる、興味ある、楽しい総合雑誌を目指して、変転きわまりない、この戦後の五年間を努力して来た。

幸いにこの編集が認められ、異色ある企画と、早くて正確な記事によつて逸早くジヤーナリズムから認められたばかりか、老若男女を問わず広く愛読されるに至つたのは、大きな欣びであるが、更に、明るく、楽しい、知識と教養の家庭雑誌として、津々浦々まで、よろこび読まれるよう、全社を挙げ一段と精進することを誓う。[53]

その後も「知識と教養の家庭雑誌」として 1954 年まで刊行されていくが、さらに 1955 年に入ると規模の拡大を図ろうとしていく。読者からの要望により、月刊から月二回へと刊行ペースを上げようと試みたのである。1955 年 3 月号の編集後記では、誌面のリニューアルについて以下のように述べられている。

昨年の愛読者からの投書を整理してみますと、頁を減らしてもよいから安くして月二回発行にしたらどうかという御意見が圧倒的でした。本社は愛読者の御要望に沿うべく、長い間研究をつづけてきましたが、ここに満八週年を記念して、「丸」は御覧の通り新しく生れ変わりました。このスマートさにみがきをかけて、別冊、増刊の発行をも企画しております。今のところ、二月の末に第一回の増刊を考えておりますが、絶対に他の追随を許さない本誌独特の味を育てて行こうと努力しています。[54]

月二回発行を試みようとした背景には、当時勃興し始めた『週刊新潮』などの出版社系週刊誌の存在も関わっていたと考えられる。『丸』と同じような時事的な話題の解説や読物を、速報で掲載する週刊誌の存在は脅威

---

[53] 芝東吾「「丸」創刊五周年に際して」『丸』1953 年 3 月号、3 頁。「編集後記」でも以下のように編集部より述べている。「面白くためになる記事にも力を入れて、政治、経済ばかりでなく、広く話題を採上げ、一家こぞつて楽しみ、読み、明日の教養に役立たせるような雑誌にしてゆきたいと考え、その第一歩を、この特別記念号からスタートした訳です」(1953 年 3 月号、169 頁)。

[54] 「編集後記」『丸』1955 年 3 月号、82 頁。

になったはずである。かねてより読者欄では、次の声が寄せられていた。

> 一筆、最近の「丸」について批評してみることにした。正直にいつて、少々失望しているからだ。毎月終りのページにある読者層の一方的なお世辞めいた言葉の連続は、我々の如きものにとつては苦痛の他の何ものでもない。リーダイについてこれを非難される人々があるようだが（つまりリーダイはつまらんから「丸」にかわつたという人）「丸」も結局ダイジエスト記事が多いではないか。一方は主として外国記事の話題が中心だから、我々の身近かな問題とかけはなれていて面白くないというのだろう。「丸」がそこを狙つて日本ダイジエト（ママ）方式を押し進めているのならそれまでのことだが、週刊誌を追いかけていては手遅れになる。話題はやはり新鮮なうちに取上げてほしい。いやしくも総合雑誌というからにはもつともつと自分から問題をとりあげて、読者を啓発するような方向へ努力しなければ駄目じゃないですか。[55]

『リーダーズ・ダイジェスト』や週刊誌と比較したうえで、「話題は新鮮なうちに取上げてほしい」という読者からは要望されている。

だがその後、1955 年 5 月号で月二回発行について「準備を重ねているが技術的な面で遅れています」と伝えられたのを最後に続報がないまま[56]、突如 1955 年 9 月号が休刊となる。そして 10 月号より聯合プレス社から聯合出版社へと出版元を変える。

この急転直下の出版社変更の経緯については、資料的な制約もあり、不明瞭な部分も多いが、当時の誌面と塩澤実信による出版研究とを照らし合わせると、どうやら聯合プレス社の社長・芝東吾が身売りを行ったようである[57]。そして残された編集部の記者たちによって、新たに「聯合出版社」として刊行が継続された。当時の編集部には、小説家の牧屋善三や作詞家となる藤間哲郎、そして政治学者丸山眞男の弟・丸山邦男が在籍していた[58]。

---

[55] 「読者のページ」『丸』1954 年 7 月号、133 頁。
[56] 「編集後記」『丸』1955 年 5 月号、82 頁。
[57] 塩澤実信「光人社―戦記に籠められた反省」（『出版社大全』論創社、2003 年、584-590 頁）では、その後「戦記雑誌」化した『丸』を主幹として担った高城肇への聞き取りを行ったとみられる。ただし、聞き取りの部分では「芝吾郎」とされている（585 頁）。
[58] 塩澤実信「光人社―戦記に籠められた反省」『出版社大全』論創社、2003 年、585 頁。

しかし、編集部の記者たちだけでの刊行には限界があり、鱒書房と譲渡契約を結ぶこととなった[59]。鱒書房の社長・増永善吉の弟である増永嘉之助が、1956 年 3 月に潮書房を設立し、『丸』の刊行を引き継いだ[60]。潮書房発行となった『丸』1956 年 4 月号より「戦記特集雑誌」として、判型も B6 から A5 サイズに改められた[61]。これ以降、戦記を専門とする今日の『丸』の姿となったのである。

6. おわりに ：占領期における戦記の受容

本稿では、占領期から 1950 年代中頃までの「総合雑誌」としての『丸』の動向をみてきた。その姿は、現在の戦記雑誌としての『丸』とは大きく異なるものであったが、以下では、議論をまとめながら、「総合雑誌」としての『丸』にどのような意味があったのかを検討したい。

「総合雑誌」としての『丸』を子細に見ていくなかで明らかとなったのは、「戦争の記憶」を綴った戦記に「明日の教養」としての意味が見出されていく状況であった。当時の『丸』に掲載された戦争体験や抑留体験を記した手記は、占領期の社会のなかで複数の読み方がなされるものであった。

戦記は終戦後間もない状況のなかで、戦争で失った肉親の「最期」や、あるいはロシアに抑留された肉親の「現在」を知るための手がかりとして、切実な意味を持つ読物であった。その一方で、戦時期に隠された「真相」を読む高揚感を提供する向きもあった。

このように戦記に両義的な読み方がなされるなかで、「戦争の記憶」には、「近代人のトピックス誌」を名乗る『丸』が提示しようとする「明日の教養」としての意味を内包するものとして見出されていった。ただし、占領期の『丸』における「明日の教養」は、公職追放の身にあった政財界の論客らによって提示されたものであった点は留意が必要である。

これまでの戦記に関する研究では、講和条約発効後の占領政策への反動として「戦記ブーム」が生じたとされてきた。ただし「総合雑誌」としての『丸』のなかには、戦記の存在が「明日の教養」の一つとして読者から歓迎されていく状況が見て取れる。つまり、占領期より戦記にはすでに一

---

[59] 塩澤実信「光人社―戦記に籠められた反省」『出版社大全』論創社、2003 年、586 頁。
[60] 『日本出版文化史』日外アソシエーツ株式会社、2013 年、171 頁。
[61] 「編集後記」『丸』1956 年 4 月号、106 頁。なお奥付の編集人の欄には増永嘉之助、そして発行人の欄には牧屋善三の本名である岡田五郎の名前が記されている（『丸』1956 年 4 月号、106 頁）

定の需要があり、『丸』ではそれを下地に「占領政策への反動」を重ねていくなかで、戦記の存在が誌面のなかで増していったといえよう。

本稿では以上のように、これまで戦後史研究やメディア史研究において等閑視されてきた、総合雑誌時代の『丸』の様相を検討してきた。現在まで続く『丸』の歴史のなかで、本稿で扱った「総合雑誌」時代がどんな意味を持つのかについては、今後『丸』を通史的に整理する作業のなかでさらに検討していきたい。

Keywords: 占領期　総合雑誌　戦争体験